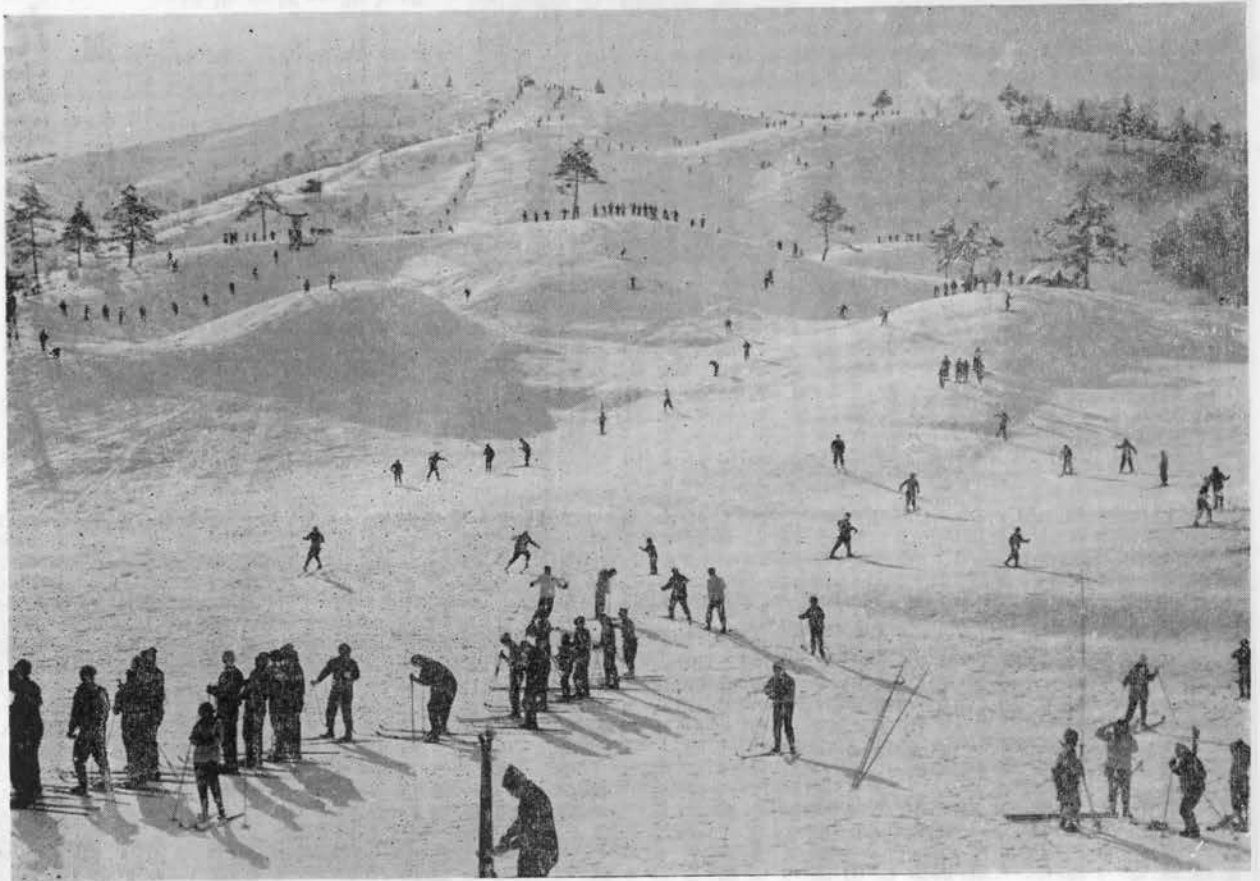


山と博物館

第11巻 第12号 1966年12月25日 大町山岳博物館



動物園のこと

博物館では北アルプスにすんでいる動物を飼育している、数こそ少ないが大はカモシカから小はリスまで。

エサ代も少額ではないが、飼育舎の修理やそれに関連する費用もばかにならない、というのは金網などが人工的に破損させられるからである。そこで金網に手足がとどかないように手すりを作る。自動車を平気で乗り入れるのがいるので自動車止めの柵も作る。

動物をみている人も静かに観察するなどとは縁が遠く、棒でつついてみたり、食べられそうもないものでジャンジャンほうり込む、「餌は与えないで下さい」の看板は真正面にあるのだがに等しい。

この様なことは別に私どもの動物園ばかりではないと思うが、この人間様の害から動物を保護するには頭をいためる。

夜になると放し飼いの犬が二、三頭位集まって網の外から中の動物を追いまわす、これにはまったく閉口する。観覧者や犬の飼主の良識を待つより仕方ないなどと気楽なことをいっていたらどうなるだろう。わかり切った事である。ノルウェーに行っている友人から最近こんな手紙をもらった。動物博物館に行

って白鳥のエサの話したら「お宅では白鳥を飼うのですか」と不思議そうにいう仕末、要するに鳥などというものは天然に生きていくもので、人が飼うものとは夢にも思っていないらしい。そういえば植物園はあるが動物園はない、俺の居た学生寮でも窓の先の枯木を朝晩リスがとびまわっているが、日本と違って誰もいじめようとしないうえ、リスの方も人間を気にしてはいなようだ。だから動物をわざわざ集めてみなくても自然の中で生きていくのが自由にみられるので動物園もいらないのでしよう。

(千葉彬司)

××× 山羊乳で育ったカモシカ ×××

海川庄 一

保護された子どもカモシカ

昭和四十年六月九日、長野県小県郡真田町字傍陽の春原悦男さんは、長野、群馬県境も近い十ノ原地籍の傾斜した山林で、プルト！ザーを巧みに操りながら、伐り出された材木の集積に当っていた。エンジン止めて一服していると、聞きなれない仔山羊のような鳴き声が聞える。笹の葉をかき別けて近づくと、森林の下に真っ黒なカモシカの子どもが

生後一カ月の大助



坐っていた。正午頃までそのままそっとしておいてみたが、母を呼ぶ仔カモシカの声は次第に弱まり哀調を帯びて来た。「生後間もない赤ん坊だ。このまゝ放っておくわけにはいかない。」春原さんはカモシカの子どもを抱き上げると、現場近くまで持って来て自分の車に乗せて一路自宅へ急いだ。

家族の一員として育てられる
四人の子どもの中でもある春原さんの奥さん、この、突然連れて来られた真っ黒な赤ん坊を我が子のように可愛がって育てた。最初の日、早速、牛乳を二倍に薄めたものを温めて哺乳瓶で与えてみたが、乳首に吸いつかなかつた。しかし、夜八時に再び与えたところ、どうやら五〇cc飲んでくれた。翌十日は、山羊乳を水で二倍に薄め温めて与えたところ、よく飲んだ。そして、腹の具合を悪くしたのか黄色の下痢様便をした十一日以後、しぼり立ての牛乳を牧場から取り寄せて与えることにした。黄色下痢様便にブツブツが混じって来て、やがて仔山羊の糞のような正常便になり、以後、下痢することもなく日増に足腰がしっかりとして来たという。夜は春原さんの子どもたちに抱かれて、同じ布団の中で眠った。オシッコをしたくなると外へ出たがるので出してやると、縁側から庭へ下りて草の蔭で用を足してくるのだった。

引取りに向う

六月二十四日、夜明けを待って私は針ノ木雪溪を下った。雷鳥探隊隊出動後の留守をあづかる館長から前夜トラシューパーによって、真田町にカモシ

カの幼体が保護されているという連絡が入ったからだ。早朝、館について、先づ横沢獣医さんに連絡。一日の都合をつけて真田まで同行してもらうことにする。飼育係の荒井氏と私、それに獣医さん、運転手一行四人は十時出発。途中、真田町教育委員会へ立寄り文化財担当の青木さんから状況を聞き案内していただく。林道を登りつめて、伐採の作業現場で春原さんに面会、自宅まで同行してもらおう。ようやくにしてカモシカに会えたのは日も暮れかゝった午後五時半。

黒毛で額のあたりにちよっと白い毛の生えた可愛いカモシカの雄であった。一行の到来におどろいたのか、庭から情性をつけて走っていき五〇cmほどの高さの縁側へとび上がり、家の中へ入ってしまった。「これなら大丈夫、きつと育つ。」我々の第一印象はみんな同じだった。

生後十七日(?)のカモシカ

六月十日の黄色下痢様便、我々はこれを胎糞からの移行便とみた。そして、このカモシカの生年月日を六月八日と推定した。引取りに行った六月二十四日の時点で生後十七日令くらいである。こうした幼体に接する機会は珍しい。このカモシカの状態はそのまゝ貴重な記録だ。そう思って、輸送開始までのわずかな時間出来るだけ沢山の事実を春原さんの奥さんから聞き出すことに努めた。①六月二十三日の時点で哺乳は朝八時・昼十二時・夕方五時・夜十二時の一日四回。牛乳(原乳)一五〇ccにぬる湯八〇ccを加えたものを与え、一回にはほぼ全量を飲み干す。一日原乳六〇〇ccである。②前記の哺乳をするとき一時間ほど昼寝をし、その後一時間運動、更に二時間間休ませると次の哺乳が出来る。③尿は昼間三回、夜一回、タラタラと長小便する。④糞は一日一回、朝早く、黒い粒を数粒やる。時よになって黒い粒が細い糸状の白色粘液によつてつながることがあった。⑤起床は朝四時である。⑥五日程前から盛んに着物の裾をしや

ぶるようになった。また、柔かい草の葉などもなめるようになったが、まだ噛み取ることが出来ない。⑦牛乳は水で冷して保存しておいても一晩おいたものは飲まない。全く新鮮でなければ使えない。⑧ヘソの緒はよく乾いているがまだ落ちてはいない。⑨角は全く出ていない。

抱いたまま輸送

午後六時十分、ジブワゴンの客席に抱かれたまゝのカモシカは、春原さん一家と地元の関係者が名残りを惜んで見送る中を真田町を後にした。出来るだけ舗装道路を使って輸送するために上田から長野へ出て信州新町を廻るコースをえらんだ。午後八時、信州新町着、車を止めて休息をとらせると安心して眠る。八時三十分新町発、九時二十分山岳博物館到着。輸送時間は途中の休息を含めて三時間十分であった。夜九時半、春原さんの家からもらって来た牛乳を与えてみるが全く飲もうとしない。こうなることをおそれ、吸い入れた乳首を哺乳瓶ごともらって来て使ったのだがダメである。小型の乳首に取り替えてみるが結果は同じこと。真田を発つ前に飲ませた乳はいつもの半分だし、何とか乳を飲ませて寝せたいところである。夜十一時、市内の牛乳屋へ車を走らせ、夕方しぼった新鮮な牛乳をもらって来る。37度に温めて与えてみるが全く受け付けない。90度に及ぶ長途の輸送は生後二週間のこの赤ちゃんカモシカに、いさゝか疲労を与えたようである。何よりも、住みなれた家と、家族同然の春原さん一家から離されたということが、最大のショックであったにちがいない。我々はこの乳を受けつけないカモシカの状態をストレスによる抗飲と判断した。そして、早く安心感を与えるため、カモシカがゆらべまで布団の中で抱かれて眠ったように、今夜一晩だけは布団の中で寝かせてやろうということにした。夜十二時、宿直の荒井氏に抱かれてカモシカ

は眠りについた。

山羊乳につく

六月二十五日、午前五時、牛乳を温めて与えてみるが全く飲まない。午前七時、しぼり立ての山羊乳をもらって来て与えてみるが全く受けつけない。午前八時、カモシカ舎に移す。九時、再度山羊乳の入った哺乳瓶を差し出してみるが飲思はない。腹は全く空っぽである。きのうの元気はどこへやら、運動場の片隅に坐ったまゝ動かない。「一滴でもよい。何の乳でもよい、ちよつと飲んでみて呉れし」切なまざれに「人乳」まで与えてみた。しかし、これもやはり飲まない。横沢医師も朝から来ていてくれた。こうなつたら、多少強制的手段も止むを得ない。十時三十分、ブドウ糖の栄養灌腸をしてもらう。十一時、口を割って哺乳瓶を含ませ、山羊乳を半強制的に注入する。一滴、二滴と乳が咽を通ると、多少飲む気が起つて六〇ccを飲み下す。十一時三十分、ようやく山羊乳一〇〇ccを自主的に飲む。空腹状態のところへ急激に飲んだので呼吸数がひどく増え、苦しうである。兎に角、やつと飲んでくれた。急に前途が明るくなった。体重測定をする。二、六匁。午後四時、山羊乳一〇〇ccを給与。午後五時、元気が出て盛んに歯をギクギク云わせながら草を噛んでいる。しかし、噛み切れない。五時十分、立上つて比較的元気に歩行。横飛びに跳るような動作さえみられる。午後七時、山羊乳一〇〇ccを極めて自然に飲み干す。哺乳瓶の回を重ねる毎に元気をとりもどして来た。夜九時三十分哺乳瓶を試みるが全く飲まない。授乳間隔が短かすぎようであるため、初日はこれで授乳を打切る。一日哺乳量は山羊の全乳三六〇ccである。

一日六回哺乳

水分量のオーバーすることをおそれ、山羊の全乳を使い、一回量も一〇〇cc内外におさえ、朝六時から夜九時まで三時間隔で一日六回哺乳が行なわれた。六月二十六日四五〇

cc、二十七日五〇〇cc、二十八日五八〇cc、二十九日六二〇cc、三十日六八〇ccと慎重に哺乳量を増やし、七月一日から七二〇ccに止めてひとまず様子を見た。この間、カモシカは極めて順調に活気を取り戻し、よく人にも馴れて、後をついて走るようになった。七月四日午後、推定生後二十七日ではじめてアカザの葉片を嚥下した。カモシカの「喰い初め」である。しかし、まだ固い草は噛み切れない。

七月に入り一日の哺乳を朝六時から夜八時まで三時間半間隔の五回哺乳とし、夜の授乳は宿直員が当った。体重の増加をみながら一日に体重の二割程度の乳を与えるようにした。しかし、一日哺乳量が八〇〇ccを越えるようになってから、多少糞が軟かくなりすぎる傾向がみられた。最高哺乳量は七月二十一日、推定生後四十三日における九三〇ccであった。この日、粘液を伴った軟便塊を認めたので、乳の与えすぎと断定、離乳を開始した。

カモシカの離乳

離乳期にどんな粗飼料を与えるべきかについては、すべてが試行錯誤であった。姉さんカモシカの「母子」がいる運動場が二つに仕切られ、四〇〇平方メートルの遊び場が、仔カモシカのために与えられた。運動場内にはカヤ、タガネソウ、フジ、ヤマツツジ、二・三の禾本科の草などのはかに、レンゲツツジなどの有毒植物も生えている。運動場に放すとレンゲツツジも食べてしまう。大事をとってレンゲツツジを片っぱしから抜き取って捨てる。それでも運動場へ出したとたんカモシカの糞便は下痢になってしまった。一日つきっきりで観察し、下痢の原因が、フジの若芽の過食にあることをつきとめた。カモシカの好物のフジの若芽を私は片っぱしから摘み取って捨ててしまった。しかし、もの五日もたないうちに、再びフジの若芽が伸びて来てカモシカの下痢が起る。思い切って乳の量を下げると糞は正常に戻る。しかし、乳を下げすぎると、また消化不良が起る。そんなこと

を繰り返している間は絶対に体重は増えない仕方なし、せまい観察場にとし込めて、草を十グラム増したら乳を十cc減らすと云った徹底的な制限給餌を行った。

自然のふところに帰す

梅雨期もどうやら乗り切った。次は真夏の暑さである。どうしても調子は不安定だ。私は毎朝五時三十分起床、六時まではカモシカ園へかけつける。仔カモシカはもう起きている。眼の輝きや結膜の充血の有無、糞の性状などを点検し、体重を測る。私がカモシカ舎に入ると彼は心得たもので自分からポンドに乗る。調子がよければ確実に七〇〜八〇グラムは増えている。軟便になれば、一週間かゝつて増えた体重も一日でもとに戻ってしまう。「絶対に胃腸の調子を狂わしてはならない。何とか安定した餌を見出そう。野生のカモシカの仔は何を喰っているのだろう。そしてどんな母乳をどのくらい飲んで育つのだろう。総ては「大助」と名付けられたこの仔カモシカから学ぶ以外には方法がなかった。「自然のふところへ帰してみよう」

私は「大助」を連れて毎朝、山を歩くことにした。朝六時第一回哺乳。三十分休息。それから舎外へ連れ出し、館の庭までかけ足。芝生の上を思い切り走らせ。その後、裏山の頂上まで標高差七〇mを約四〇分かけて、ゆつくりと登る。「大助」はぼつりぼつりと木の葉や草を食べながら登っていく。「大助」がナラの葉を七枚噛み取れば、私もナラの葉を七枚摘み取って胴乱に入れる。ウリカエデの葉を二枚食べれば私もウリカエデの葉を二枚摘む。頂上に着く頃は「大助」もほゞ満腹となる。下りは「はや足」で一気に小屋へ戻る



「大助」はこの後一時間休息。やがて反芻をはじめ、一口の食塊を八〇回も噛む。反芻は二十分も続き三十五回にも及ぶ。反芻が終つて三十分も休むと食欲が現れる。しかし、次の哺乳、給餌までには更に三〇〜四〇分運動させておく方がよい。次の給餌は、先刻カモシカに見習って摘み取った胴乱の内容物だ。与える前に種類ごとに葉の枚数をかぞえ重量測定をしてみる。こうして、カモシカの生活のリズムと、採食の内容がわかって来るにしたがって「大助」の飼育も見通しが立って来たのだ。私はいま、その後の経過を書く紙巾を持たない。だが、「大助」は生後五ヶ月半で完全に断乳し、冬季間の人工餌の制限給餌にも耐えた。夏の日、私と「大助」が毎朝登つたナラの木の生い茂る北向斜面は、今年の春から彼のための放牧場となった。「大助」に二年目の冬がやって来た。雪の中を元気に走るその姿は、もう立派な若者である。山博学芸員

一九六六年六月の大助と著者

雪山とマタギ

(1)

黒瀬 広 治

今年も冬山シーズンを迎えて、アルプス連山に積雪をみるようになった。高山地における冬山では雪はつきものであり、雪に関する技術や知識は、そこに活動する全ての生きものに要求される。自然に棲息する鳥獣は、生れながらにして雪山に生活する知恵を身につけていると言えるが、我々人間では、特に最近のように、都市での生活が広まってくると、雪山での生活は、或る一定期間の特別な体験となってしまうのである。しかし、雪国で山の仕事に従事する者には、今なお雪山は生活の場なのである。

私はかつて、雪深い東北の山村に住み、雪山に生活の糧を求めたマタギ(プロハンター)として、初雪の舞う秋から翌春の雪解けまで、雪山での狩猟生活をくり返してきた。ここでこの狩猟は職業として行われるものであり、近年盛んに流行してきた、レジャーとしてのハンティングとは、その行動と目的において全く異なっているのである。

マタギにとって雪山は職場であり、そこで安全に生きぬくためには、独特な狩猟方法と共に、雪山に関する技術が、大切な知識として、何代にも渡って受け継がれてきている。従って、ここに述べる私の話もそうした体験的生活から学んだものである。

雪山で恐れられているものの一つに「なだれ」がある。東北地方の山でも、なだれは非常に多く発生する。マタギにとってこのなだれは危険を招くものとして恐れられている。



黒瀬氏と射とめられたクマ

マタギ仲間では、先ずなだれについての対策として、それが発生する場所を見抜くことが第一とされている。なだれを分類すれば種々な型が考えられるが、実際に、山を歩いていくときに注意することは、地形によって起り易い所と、雪質によって発生し易い所に留意するのである。

たとえば、新雪の場合は一寸(三センチ位)の積雪といえども地形によっては危険なもので、ヒラ(傾斜面)では、ボサ(ブッシュ)の無い所を横に切って歩く(トラバースする)のと、一見ノコギリで切り落したような崩れ方をして、足をすくわれてしまうものである。これは積雪に対して、下生えのボサが摩擦抵抗を増すクサビの働きをしているが、裸地においては、雪のすべりを止めているものが無いからであろう。積雪のあるヒラを切つて歩くときは、出来る限り草木の生えているところを選ばべきである。草木の生えているところを選ばない、雪に對するすべり止めの働きをしていると同時に、その地表面がより安定していることを異づけている。

また、マタギにはカゴをはずすなというところが伝承されている。このカゴという意味は雪庇のことである。カゴは尾根にできるもので、地形的にでき易いのは、尾根筋のカザン(モ側)風下側である。低地に比較して、常に強風にさらされている尾根では、降雪はカザンモ側に吹きだめられる。ここでは実際の降雪量より多く積り、一種特異な型を示す。東北の山では、尾根筋にブッシュが生えているので、雪の庇のように張り出したものが、その重みのために先端が垂れさがり、下側が空いた型になる。この状態をマタギはカゴと呼んでいるが、面白いことに、ときとして、このカゴの中に穴ごもりに遅れたクマが入って冬眠するのである。

尾根を歩くとき、このカゴの上に乗る、踏みぬいて落ちることが多い。カゴが発達して、多量の雪がおいかぶさってくると、その重さに耐えられなくなると、張り出した部分の下に落ち、つけ根のところに亀裂がはいり、その上に力がかぶると深い亀裂が隠されてしまう。このような場所を歩くと六、七歩もある落し穴にはまることになり、はなはだ危険である。

前置きが長くなりましたが、次に、私が実際に雪山へ出陣して、不注意にもなだれに巻き込まれてしまい、九死に一生を得たときのことを述べましょう。

今から十五年程昔の二月の或る日、早朝から天候はくずれきみで、時々雪を伴った強風が吹きつけていた。前日、村の若い猟師が、クマ穴を見に行き、中に入っていたクマを出してしまつた。それを仕止めることができなくなつて、マタギの親方のところへ相談に来たのである。話によるとクマの入った谷は深く、近くには大きなガンクラ(ガケ)があり、マタギ仲間でも危険なところとされている。

南部(岩手県)マタギとして名の知られている親方「秋田屋」は、天候のことが気がかりであったが、私は若さにかまけて、どうしてもクマを仕止めてやろうと考えていた。時間的にも、場所的にもこの日、そこへ出陣するのは大変難しいものであった。親方は自分の息子と又吉という元海軍中尉のマタギ、そして私の四人でクマを追うことに決めた。

夜の明けない三時頃に村を出発して、我々一行は雪の中を目的地へ向つた前日のクマの足跡はすでに消えていて谷を、大きく一廻りしてミキリをすることも不可能であった。親方は村の猟師の話と天候の具合から、クマはめざす谷の中に入っていると断言した。昨夜の作戦通り、谷の入口から又吉がセコに入つて、空砲によって追い出し、私達三人が配置しているマチ(マチバ)にクマがつかかるようにするのである。

谷のかたちから、追われたクマが逃げる方向は、経験のあるマタギにはよく判るのである。

マチについて、あたりを見渡すと、樹氷が朝日に輝き、美しい光を反射している。風で枝がゆれ動くたびに、キラキラと幾種類もの光に変わる。こんななごめは雪山でなければ見られない。しかし、困ったことには、風のたけに樹氷がバサ／＼落ちるので、音がするのである。クマが近づくとをいち早く知るのにこの音は邪魔になる。仕方なく目に全神経を集中して待っていた。一時間程すると、遠く谷底の方で、セコの撃つ空砲の音がした。セコは深い雪の中をクマの隠れていそうなところを見逃がさないように順々に追いつめてくる。

マチ役の私は、尾根筋のコネット(カゴの切れめ)で寒さにふるえていた。手先は感覚が薄れてしまう。(松本市)

表紙説明

大町スキー場 撮影山本 携 挙

山と博物館 第11巻第12号

一九六六年十二月二十五日発行

発行所 長野県大町市T.D.L(大町)二二一

印刷所 大町山岳博物館

大町市下仲町

大糸タイムス印刷部